

農民道場と日輪兵舎

松山 薫

東北公益文科大学総合研究論集第40号 抜刷

2021年3月30日発行

農民道場と日輪兵舎

松山 薫

I. はじめに

日輪兵舎とは、加藤完治が所長を務め、1938年から1945年まで茨城県内原に存在した満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（内原訓練所）に、訓練生の収容のために建てられた建造物である。全国から集められた数え年15～19歳の少年たちは、古賀弘人により考案された円形平面と円錐形の屋根という独特な形態を持ち、内原訓練所に数多く建てられたこの建物で、2～3か月起居して訓練を受けたのち、満洲（現在の中国東北部）に渡航した。日輪兵舎はそこで生活した訓練生に強い印象を残したのみならず、国策であった満蒙開拓青少年義勇軍の志願者募集のためのさまざまな広報媒体に登場し、さらに訓練生だけでなく彼らを送り出す立場の学校教員等を対象に制度への理解を普及させるために盛んにおこなわれた体験入所を通じて、その存在は人口に膾炙していった。かくして、日輪兵舎は内原訓練所の象徴とみなされるようになり、やがて各地にそれを模した建物が建てられるようになった（松山、2004、2005、2009、2015）。

筆者は、戦後社会においてほとんど忘れ去られていたこの日輪兵舎という建物に着目し、内原訓練所のそれのみならず、全国各地に建てられた日輪兵舎の記録を発掘し、それが満洲移民送出において果たした役割を考察してきた。戦前の満州開拓関係の雑誌・書籍・新聞記事、戦後各地で発刊された満洲開拓史、各都道府県の自治体史、農業史、教育史、郷土写真集等の文献を渉猟し、また日輪兵舎（異称を含む）のインターネット検索を長期継続的に行い、データベースを構築・更新している。その実例を追っていくと、各地の日輪兵舎の用途が必ずしも満蒙開拓青少年義勇軍予備軍の10代の青少年に対する開拓訓練のみに限定されるわけではないことが明らかになった（松山、2005、2015）。

本稿では、農村の青壮年を対象に、昭和戦前期に各地に設立されたいわゆる農民道場において建設された日輪兵舎を取り上げ、その分布状況を確認する。各地で模された日輪兵舎として、現在筆者は100か所を超える数を把握してい

るが、そのうち最も多い建設主体は制度上のターゲットである高等小学校／国民学校もしくは青年学校であり、その次が農民道場であるからである。満洲移民が国策化したのちは、まず成人による一般開拓団の送出が図られ、満蒙開拓青少年義勇軍による青少年移民は戦況の悪化による成人移民送出数の減少を補完する意味があったので、成人の開拓送出と満蒙開拓青少年義勇軍の送出とは車の両輪の位置づけにあり、満蒙開拓青少年義勇軍制度の産物である日輪兵舎が農民道場に造られることに違和感はなかったためと考えられる。

II. 農民道場の設置とその変容

農民道場とは、昭和恐慌による農村不況下における官製運動である農山漁村経済更生運動のもとで、1934年の農林省令に基づき制度化され、全国に整備された修練農場の通称である。それぞれの農民道場の起源は公設・私設を問わずさまざまなものがあり、1934年以降に新設されたものばかりではない。農民道場の当初の目的は青壮年層を対象とする農村中堅人物の養成であった。その後、1936年に大量国策移民事業の実施が決定され、その対象者に対する訓練の実施を、拓務省が全国の国民高等学校、農民道場、農学校などの機関に委嘱することになった。これを受けた1938年の農事講習所規定の一部改正により、多くの農民道場の機能に拓殖訓練が加わることとなった（農林水産省農林大臣官房総務課編、1959；満洲開拓史復刊委員会編、1980）。

III. 開拓訓練施設における日輪兵舎

次の第1表は、満洲開拓史復刊委員会が1980年に増補復刊した『満洲開拓史』に掲載されている1940年10月時点における「満洲開拓民内地訓練所」のリストに、その施設に日輪兵舎様式の建物があるかどうかに関する、筆者の調査による情報を追加したものである（現時点で把握しているもの）。50か所の訓練所が一覧に挙げられており、大半は既存の農民道場に併設されている。この50か所のうち、筆者は15か所にI. で述べた方法で日輪兵舎の存在を確認しており、その分布は広い範囲におよぶ。

これらの施設の訓練内容には、加藤完治の山形時代以来の山形県自治講習所、日本国民高等学校、ひいては内原訓練所の思想や方式が多く取り入れられてい

る。すなわち、皇国思想に基づいた農本主義によるカリキュラムであり、礼拝、視、日本体操（やまとばたらき）¹⁾、武道、軍事教練などがセットになっている。ここに、内原訓練所の象徴といえる日輪兵舎を建設することで、ソフト・ハードともに農民道場の「内原化」が完成するともいえるだろう。

1934年の農民道場設置制度と、満洲開拓移民政策は、同根の政策であり、かわった人間も重複していた。加藤完治の直弟子で加藤の後を継いで山形県自治講習所の所長も務めた西垣喜代次は、1938年に各地の農民道場設置事業に携わるために、技官として農林省に移籍した。そして、各地の農民道場の職員には、加藤の教え子が多く派遣されていた（西垣，1944）。農民道場の制度化より後に生み出された日輪兵舎が、そうした施設に追加的に建設されていくのも不自然なことではなかったといえる。

なお、第1表中に黒丸で存在を示した日輪兵舎は、1棟も現存していない²⁾。

第1表 「満洲開拓民内地訓練所」と日輪兵舎

府県	訓練所名	所在地	日輪兵舎有り・・・● ()内は典拠
青森	県立修練農場	北津軽郡金木町	
岩手	県立六原農民道場内開拓民訓練所	膽沢郡相去郡	
宮城	県立宮城農学寮内開拓民訓練所	宮城郡広瀬村	
宮城	南郷国民高等学校	遠田郡南郷村	
秋田	県立修練農場内開拓民訓練所	南秋田郡天王村	
山形	県立国民高等学校	南村山郡上山町	●(創立八十周年・閉校記念事業実行委員会編, 1992)
山形	大高根青年修練道場内開拓民訓練所	北村山郡大高根村	
福島	県立修練農場内開拓民訓練所	西白河郡中畑村	●(金子編, 1979)
茨城	県立農民道場内開拓民訓練所	東茨城郡長岡村	
茨城	日本国民高等学校	東茨城郡内原村	●(旬報編集室編, 1940)
栃木	県立清原農学寮内開拓民訓練所	芳賀郡清原村	
群馬	県立箕輪青年道場内開拓民訓練所	群馬郡箕輪町	
埼玉	県立秩父農林学校付設拓殖訓練所	秩父郡横瀬村	●(埼玉県立秩父農工高等学校, 1962)
千葉	県立農村道場内開拓民訓練所	印旛郡遠山村	
東京	府立拓務訓練所	南多摩郡七生村	●(本誌記者, 1940a)

¹⁾ 日本体操とその展開過程については、中房（2016）に詳しい。

²⁾ 現在、日輪兵舎は国内に4棟残っているが、2棟は学校の付属施設、2棟は民間の施設として造られたものである。

神奈川	拓務訓練所	愛甲郡妻田村	
新潟	県立農民道場内開拓民訓練所	古志郡栖吉村	
富山	県立農民道場内開拓民訓練所	上新川郡福沢村	
石川	県立松任農学校徳田訓練所	鹿島郡徳田村	●(〔無署名〕, 1938)
福井	満州移民訓練所	坂井郡平山村	
山梨	県立農民道場機山寮	北巨摩郡清里村	
山梨	県立女子拓殖訓練所	甲府市岩窪町	
長野	県立御牧原修練道場内開拓民訓練所	北佐久間郡川辺村	●(本誌特派記者, 1938)
長野	県立桔梗ヶ原訓練所	東筑摩郡塩尻町	●(本誌記者, 1940b)
岐阜	県立修練農場	可児郡春里村	
静岡	県立引佐農学校内開拓民訓練所	引佐郡金指町	
愛知	県立追進農場内開拓民訓練所	岡崎市美合町	
三重	県立農林勸修場内開拓民訓練所	飯南郡粥見町	●(山下, 1996)
滋賀	拓殖訓練所	蒲生郡北比都佐村	
兵庫	県立国民高等学校	加西郡北条町	
奈良	県立農民道場豊農塾併設満州農業移民訓練所	山辺郡都介野村	
和歌山	県立紀南農学校付属拓殖道場	日高郡切目村	
鳥取	県立修練道場内開拓民訓練所	東伯郡南谷村	●(鳥取県, 1941)
鳥根	県立三瓶農民道場内開拓民訓練所	安濃郡佐比売村	
岡山	県立三徳塾内開拓民訓練所	上道郡角山村	●(岡山県立農業研修所三徳塾, 1958)
広島	県立修練道場内開拓民訓練所	比婆郡山内東村	●(広島県民の中国東北地区開拓史編纂委員会編, 1989)
広島	旦ヶ原修練農場内開拓民訓練所	賀茂郡川上村	●(飯田編, 1981)
山口	県立農民道場内開拓民訓練所	防府市牟礼町	
香川	県立農事講習所開拓民訓練所	仲多度郡榎井村	
愛媛	県立農事修練場開拓民訓練所	周桑郡庄内村	●(愛媛県史編さん委員会編, 1986)
徳島	県立久勝拓殖訓練所	阿波郡久勝村	
高知	県立婦全農場内満州拓土訓練所	長岡郡本山町	
福岡	県立農土道場宗像塾内開拓民訓練所	宗像郡赤間町	
佐賀	開拓農民佐賀県訓練所	藤津郡七浦村	
長崎	県立雲仙農民道場内開拓民訓練所	南高来郡湯江村	●(内田, 1939)
熊本	県立農民道場内開拓民訓練所	球磨郡水上村	
大分	県立玖珠農学校大分県内地訓練所	玖珠郡玖珠町	
宮崎	県立茶臼原農民道場内開拓民訓練所	児湯郡上穂北村	
鹿児島	県立農道館内満州農業開拓民訓練所	出水郡阿久根町	
沖縄	移住民訓練所	那覇市郊外	

満州開拓史復刊委員会(1980)：『満州開拓史』p.202に昭和15年10月現在のものとしてあげられている訓練所に対し、筆者が2021年2月時点で日輪兵舎の存在を確認しているものに対し●を付した。典拠は複数あっても本稿では一つのみ示した。

IV. おわりに

日輪兵舎はさまざまな主体により自発的に各地で建てられたため、その網羅的な把握は方法論的に困難が多い。ただ、Ⅲ. で述べたような背景から、農民道場には日輪兵舎が建てられる可能性が相対的に高いと考えられる。農民道場の大部分は、戦後は農業経営伝習農場として生まれ変わり、さらに1970年代には農業大学校となっているところが多い。また、農林学校に付属していた同様の訓練施設は、戦後は新製の農業高等学校や大学の農学部へと引き継がれている。第1表の日輪兵舎の存在に関する情報は暫定的なものであり、本来ならばこれらすべての後継施設へ赴いて、一次資料や関係者の編纂した記念誌などを現地で探索することが必要であるが、コロナ禍のもとではそれは困難である。何らかの代替的な方法で、こうした日輪兵舎の拡散過程と農業政策・移民政策との相関性をより正確にとらえることを試みたい。

文献

- 飯田米秋編（1981）：写真集 明治大正昭和 東広島 ふるさとの思い出 199. 国書刊行会.
- 愛媛県史編さん委員会編（1986）：愛媛県史 社会経済1 農林水産.
- 内田一平（1939）：瑞穂を語る. 長崎農民社.
- 岡山県立農業研修所三徳塾（1958）：岡山県立農業研修所三徳塾 創立二十五周年記念 記念式並びに記念行事次第.
- 金子誠三編（1979）：写真集 明治大正昭和 白河 ふるさとの思い出 32. 国書刊行会.
- 埼玉県立秩父農工高等学校（1962）：六十周年記念誌.
- 旬報編集室編（1940）：義勇軍旬報集録. 満蒙開拓青少年義勇軍訓練所.
- 創立八十周年・閉校記念事業実行委員会編（1992）：思い出の写真でつづる「創立八十周年記念誌」上山農業高等学校写真集. 山形県立上山農業高等学校.
- 第二拓殖訓練所（1941）：三重高等農林学校内拓殖訓練所要覧.
- 鳥取県（1941）：農民訓練道場 日輪兵舎 建設寄附募集（農務課）鳥取県公報 昭和十六年四月十八日 第1225号.
- 中房敏朗（2016）：1920年代から1930年代における「日本体操（やまとばたら

- き)」の展開過程について：国民高等学校の創始から満州開拓移民の展開に至る過程に着目して．体育学研究，61-1，319-338.
- 西垣喜代次（1944）：修練農場．汎洋社.
- 農林水産省農林大臣官房総務課編（1959）：農林行政史 第二卷．財団法人農林協会.
- 広島県民の中国東北地区開拓史編纂委員会編（1989）：『広島県満州開拓史 上巻』
- 本誌記者（1940a）：東西の興亜教育を視る．新満洲，4-3，52-57.
- 本誌記者（1940b）：大陸の花嫁学校を視る 長野県桔梗ヶ原女子訓練所訪問記．新満洲，4-11，52-55.
- 本誌特派記者（1938）：高原に鋳揮う“土”の道場－八ヶ岳修練農場の或る日－．拓け満蒙，2-9，46-49.
- 松山 薫（2004）：満蒙開拓の痕跡をたずねて－山形県にあった「日輪兵舎」－（序章）．東北公益文科大学総合研究論集，8，75-90.
- 松山 薫（2005）：満蒙開拓運動と各地の「日輪兵舎」．日本地理学会発表要旨集，67，164.
- 松山 薫（2009）：「日輪兵舎」の全国的分布とその建造過程（発表要旨）．歴史地理学，51，63-64.
- 松山 薫（2015）：日本各地の「日輪兵舎」－忘れられた満蒙開拓青少年義勇軍の象徴－．季刊地理学，67-3，191-195.
- 満洲開拓史復刊委員会編（1980）：満洲開拓史．全国拓友協議会.
- [無署名]（1938）：石川に日輪兵舎．（満移ニュース），拓け満蒙，2-10，63.
- 山下茂穂（1996）：百枚の写真 三重高農 戦中の軌跡 A22小史.